

オーストラリア・モナシュ大学



©Melburnian, 1 February 2007, Creative Commons BY 2.5



小児科専門医
周産期(新生児)専門医
山岡 繁夫(平成11年卒)



救急医療部 小児科
新田 雅彦(平成4年卒)
(大阪医科大学医師会 編集委員)

新田 今回の海外留学レポートはインタビュー形式でお話をいただきます。まず、山岡先生の自己紹介と留学しようと考えた理由をお聞かせください。

山岡 私は、平成11年卒。小児科・新生児科所属、周産期センターNICUに勤務しております。現在43歳。7歳・小学校1年生の娘がいます。当然、妻も(笑)
今回、海外留学レポートの依頼をお受けしましたが、実はまだ留学前です。この4月からオーストラリアの研究施設に留学する『予定』ですが、恐ろしいことに、この2月末の段階で未だビザが下りていません…(大丈夫でしょうか?)

新田 …(大丈夫ですか?)
ところで、山岡先生が留学を志した理由についてお話してください。

山岡 大学院生時代から現在まで、実に10年以上も本学に勤務してきました。大学病院で勤務する誰しもが抱く悩みではありますが、臨床と研究の両立の難しさを痛感してきました。
臨床に関しては、目の前の患者さんに対して、その時、その時に真摯に対応するという形で何とかこなしてきたのではないかと自負しております。一方、研究に関しては、満足な時間を取れず遅々として進まないというジレンマを抱え続け、実際、成果も上がらないまま、常々、研究に専念できる環境に身を置きたいという思いが胸にくすぶって

ました。
今回の留学先は、基礎研究施設であり、研究だけに専念できる環境であることは、希望にかなった環境と言えます。しかし、“無給”ですが(笑)
一方、研究とかけ離れた“不純”な動機もあります。医者という職業の宿命ですが、家族・家庭にあまり時間を費やせませんでした。
留学先では、現在と比べ、プライベートな時間はかなり多くなると聞いています。家族、特に娘に今まで寂しい思いをさせてきた分、この2年間は娘が嫌がるくらい(笑)一緒に時間を過ごしたいと思っています。

新田 無給はさぞかし大変ですね。しかし、今までできなかった思いを実現するために奮起されたのですね。留学先はどのように決められたのですか?

山岡 漠然とではありますが、かねてから海外留学の希望はありました。3年ほど前に話を進めて行こうとした時期がありましたが、諸事情により諦めざるを得ない状況となりました。それ以来、私の気持ちの中では、海外留学という思いは過去のものとなりました。
ところが、昨年夏、久々にお会いした元上司に、酒席で突然、「お前は、1回、外に出ろ、留学しろ」と助言を受けました。元上司から話を聞かされた直後は、40を過ぎた年齢、まだまだ続く住宅ローン、昨年、何とか合格した私立小学校に通

い出したばかりの娘のこと、等々が頭に浮かび、「ありえへん」というのが正直な感想でした。その場で断るのも失礼な話だと思い、「考えさせて頂きます」と一旦持ち帰りました。しかし、意外にも、自分の心の奥から「これを逃せば、一生、後悔する」という言葉が繰り返し沸き起こり、その言葉に押されるように、気づけば、それから1か月後、留学をすすめて頂いた先生には「行きます」と答えていました。その先生からは、「留学先は紹介してやる」と言われていましたが、協議した結果、元上司が懇意にしている臨床施設ではなく、他の基礎研究施設に打診することになりました。

新田 良きメンターに巡り会ったんですね。

山岡 また、運命的だったのか、この研究施設は、まさに私が過去に留学を進めようとしていた施設だったこと、また3年前に国際学会で来日され、私が挨拶させて頂いた先生の教室でした（後で聞くと、私の挨拶など、全く記憶にはなかったようです）。

さらに幸運は重なり、僕がeメールで留学の打診をした2週間後に、たまたま日本の、それも関西圏の研究施設にお越しになるとのことで、早速ご挨拶に伺いました。僕の拙い英語にも真摯にお応え頂き、“その場で留学の了承を頂く”という、これまたあり得ないような幸運に恵まれました。

留学準備に関しては、やはり経験者、とくに同じ国に留学されている先生のアドバイスは欠かせません。残念ながら、我が教室にはここ数年、海外留学をされた先生はおられず、今後の留学準備をどうしようかと思い悩んでいた時、もう一つの幸運が舞い込みました。

3年前、件の国際学会でたまたま知り合った先生が僕の留学先の施設にいらっしゃったことを思い出し、たまたま伺っていた連絡先に思い切ってメールしてみました。しかし、もう3年も前の話。普通は留学を終え帰国されている時期でしょうし、メールアドレスは留学先施設のもののようでしたから、2週間が経ち、やはり無理かと諦めかけていた矢先、その先生から返信が届きました。しかも、まだその施設で研究を続けられており、近々帰国予定とのことでした。（我ながら、なんたる幸運!）そこからは、その先生から他の多くの日本人研究者の先生方をご紹介頂き、色々と有用な情報を頂い

た結果、信じられないほどの速度で、どんどん留学準備が進んでいきました。

留学すると決めたのが、昨年8月。打診する留学先施設を決定したのが9月。先方の教授に留学の打診を行ったのが10月。挨拶に伺ったのが11月。施設から正式な招聘状を受け取ったのが12月。ビザ申請が今年1月。（先述した通りで未だビザは下りていませんが…）この速度に、未だ自分自身がついていけない、というのが正直なところです(笑)

新田 偶然はかさなりますね？ でも偶然の様で、過去から繋がっていたようにも思えます。また、人とのつながりの大切さを感じますね。留学期間と留学先について、留学先の特徴やそこを選んだ理由など含めお話しください。

山岡 留学期間は、2年で計画しています。理由の1つは、現在の教授の任期が後3年で、その任期内に帰国するよう勧められたこと、また、娘の帰国後の学力の問題、また、無給で働くことになるため、やはり経済的な問題、これらを勘案して、この期間としました。留学先は、オーストラリアのメルボルンという都市にあるMonash UniversityのProfessor. Stuart Hooperの研究室になります。Prof. Hooperは、羊胎児を用いた胎児期から新生児期にかけての呼吸循環生理に関する研究を行っており、新生児期特有の循環器及び呼吸器疾患モデルを使った実験も数多く行っています。現在、僕が考えている疾患モデルに関しても、以前、Prof. Hooperにお聞きした際、可能だとのことのお返事を頂きました。先述した日本の研究施設というのは、兵庫県播磨にある世界最大の粒子加速装置を持つ“Spring8”で、Prof. Hooperは、毎年、この施設でウサギ胎児を用いた特殊放射線撮影装置を用いた実験も行っているため、帰国後に共同研究を行うことも可能だと考えています。

ちなみに、オーストラリアでは、実験動物として主に「羊」を用いますが、羊の繁殖期の兼ね合いで、羊胎児を実験に用いるこの教室では実験シーズンは年間で6-7月頃までに限定されます。なので、その時期の前には、各教室で羊の奪い合い（申請の段階の話です。実際に「獲り合う」わけではありません(笑)）が起こり、シーズンには

全教室一丸となり一気呵成に集中して実験を行うようです。それ以外のシーズンは、あり得ないくらいのにびりしているようですが(笑)

新田 非常に興味深い研究ですね。オンとオフがはっきりしていますが、それ故に競争も激しいのでしょうか。ところで、留学準備中困ったことなどありましたか?後輩へのアドバイスなど、お聞きしたいのですが。

山岡 留学を決めるに当たっては、考えなければならぬことが多すぎます。お金のこと、家のこと、家族の生活、子供の教育等々…。結局、この年になるまで留学を決めきれなかった理由は、それぞれの問題の多さ、それ自体に怯んでしまい、自分の中で問題を過大評価し不可能であると最初から決めてかかっていたのではないかと思います。結局、上記の問題は実際に取り組んでみると、どんな結果になるかは誰にも分かりません。この留学の話を進めていったと仮定して、最悪の状況というのはどういうことかをよくよく考えてみると、「この留学を途中で断念する」ということだけだと思い至った時、目の前が一気に開けた気がしました。また、留学の価値というものを客観的に分析するというのは大事なこともかもしれませんが、本当の価値というものはそれ自体を得るまでは、やはり、誰にも分からないと思います。留学のメリット・デメリットに気を取られ過ぎて躊躇してしまい、チャンスを逃してしまうということも往々にして起こり得ることだと思います。今回の決断に際しては、単純に、行きたいのか、そうでないのかということ自分を問うてみた結果、やはり「行きたい」という思いが強かったということが全てであったと思います。

何か大切な決断をするには、思い切って、一旦、「バカ」になってみる、とにかく飛び込んでみる、というのも1つの有効な手段ではないかと思っています。そうでなければ、この半年という極端に短い期間で留学準備をするということではできなかったと確信しています。おかげで、妻には大変な心労をかけてしまいましたが…。このことに関連して、現在、留学を考えておられる妻帯者、特にお子さんをお持ちの先生方にアドバイスできることがあるとすれば、「海外留学(とりわけ“無給”の!)に喜んで付いてくる妻はまずいない!」ということで

す。なので、もし、こういった話を奥様に持ち掛ける時は、基本的に反対されて当たり前だと思っておいください。決して「お前は男の仕事に対する理解がない!」などと怒ったりしないように(笑)

(無論、喜んで付いてきてくれる奥様であれば、手放して家宝級に良い奥様と言えます(笑))。家族同伴の留学に際して、家族(妻)の同意を得るということは第1条件です。留学先での成果や仕事内容など気になる点は多々あるでしょうが、まずはご家庭の問題解決を優先してあげるようにしてください。メルボルンの日本人留学者の先生方にも、その点は特に強くご教授頂きました(笑)

新田 良き理解者と言う点で、私も家内には頭が上がりません(笑)。最後に、留学するにあたって先生の気持ちを語ってください。

山岡 40の齢を過ぎ、家族を引き連れて無給の海外研究留学。年齢的に奨学金の取得が難しい中、大学に籍を置いた状態で留学することにご計らい頂きました小児科学教授 玉井 浩先生。人手不足の中、留学をお許し下さった新生児科長・准教授 荻原 亨先生をはじめ教室の皆様方に、この場をお借り致しまして心より感謝申し上げます。

大阪医科大学 小児科学教室の「中年の星」となれるよう(笑)、留学先でも、日々、更に精進して参ります。改めて、この留学に際しご協力を賜りました皆様方に心より感謝申し上げます。

新田 私も未だに留学したいという希望がありますので、叶わない分、先生を心から応援したいと思います。山岡先生の様な志のある若い医師たちが留学する際に、十分な援助が受けられる制度を大学に望みたいです。

先生のご活躍をお祈りいたします。チャレンジ精神をもった若い医師たちが、大阪医科大に新しい風を吹かせられることを期待したいと思います。